

加茂谷中学校 人権通信



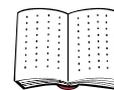
きずな

第 12 号

2023年3月3日（金）発行

加中人権スローガン

「気づき・考え・行動する」



めざす学校像

「希望と笑顔があふれる楽しい学校」

令和4年度も残りわずか…。

1年間の有終の美を飾りましょう！

いよいよ、今年度の最終月である3月がスタートしました。私自身、月日の流れの速さに驚いている今日この頃です。3年生のみなさんにとっては卒業式まで少しですね。

1・2年生のみなさんにとっても今の学年でいられるのもあと少しになりました。何ごとにも最後にもうひと頑張りすること、つまりラストスパートをかけることが大切になってきます。みなさんの全力の頑張りで、1年間の有終の美を飾ってください。その頑張りが次のステージでの糧となります。特に3年生のみなさんは自分自身が決めた道（進路）の実現に向けて、最後まで努力し続けていきましょう！

3月8日は国際女性デー。

3月8日は「国際女性デー」です。この日には、国や民族、言語などに関係なく、世界中で女性たちの功績を祝福し、ジェンダー平等について考えるイベントが開催されています。

女性は今でもジェンダーによる影響を受けやすい環境です。しかし、ジェンダーフリーの社会を実現することは、SDGsの実現のためにもなくてはならないものです。基本的な人権としての差別をなくすことの意味はもちろん、女性が本来持っているパワーを組織で発揮できるようにすることで、様々な波及効果が期待できます。

また、「国際女性デー」の由来としては、1975年に国連が記念日として制定しました。そのルーツは、1904年にアメリカのニューヨークで起きたデモなど、1900年代初頭にあった女性の参政権や女性労働者に関する運動です。

1908年にも、ニューヨークで女性の労働条件の改善などを訴えて、縫製労働者がストライキを行っています。これらの影響で、まずアメリカで1909年に「全米女性の日」が制定されました。

1910年には、17か国が参加したコペンハーゲンでの会議で、女性の権利運動を称える国際的な「女性の日」が作られます。その後、1975年に国連が国際女性デーを制定し、さらに2年後に国連の定める公式な日に認定したという流れとなっています。

このように、女性の権利やジェンダー平等については良く取り上げられるものの、いまだに性差別は存在しています。とくに日本は世界経済フォーラムが公表するジェンダーギャップ指数では下位であり、ジェンダーフリーが実現できていとは言えません。

私たちも、今まで以上に人権学習に励み、「みんなが輝く社会」を目指していきましょう。

3月8日

国際女性デー

家庭人権学習の日（毎月第1日曜日）にご家族で読んでみてください！

大分、今日も元気です

大分大学教育学部附属中学校3年 佐藤 千慧

ガッ、ガッ。寝ている私の体の芯を突き上げるような揺れ。「ピーピー、地震です、地震です」緊急地震速報が追い打ちをかけるように、恐怖心を駆り立てる。もうやめて、と何度も何度も心の中で叫んだ。

熊本・大分地震から、約四か月が過ぎようとしている。体から、やっと揺れの感覚や、耳の奥でくりかえす、緊急地震速報は鳴り止んだ。しかし、その日々の中で、日に日に大きくなっていくものがある。それは、四月十四日の熊本・大分を地震が襲った、次の日の出来事だ。

「お一人様、一つまでとさせて頂いております」「一家族様、お一つまでです」そんな言葉が飛び交う。朝一番、普段はすいている道も、車で埋め尽くされていた。みんな、必死だった。今夜も地震は来るかもしれない、という底知れぬ恐怖を相手に、必死になっていた。そしてまた、私もそのうちの一人だった。姉と買い出しに来た私は、まずは水を確保するように、と言われ、販売コーナーを目指した。そこで、私が見たものは、目を光らせて我先に、と水をカートに入れている人々だった。お店の人が、次から次へと在庫を出しているが、陳列よりも、陳列棚からなくなるスピードの方がはるかに速かった。「すみません、今日の在庫はこれまでにあります」その言葉を聞くと、群がっていた人々は早足でさっさと退散していった。

「どうでしょうか…。」

小さく、ため息交じりに腰の曲がったおばあさんがつぶやいていた。人だかりの中、このおばあさんが、水を買うことができなかつたのだらうと、容易に想像できた。しかし、私の腕の中には、一つのペットボトルしかない。家族のために必要な一本。だから、簡単にはこれどうぞ、とは言えなかつた。悩んでいる私の横を大学生くらいの男の人が通り抜けていった。彼が行った先には、えのおばあさんが。

「どうぞ、俺、ほかの店行くんで。」

そう言って何のためらいもなく、おばあさんに水を差し出していった。

「ありがとうございます。腰が悪くて、やっと歩いてきたんだけど、水も買うことができなくてね。どうしよう、って思っていたんだよ。助かったよ、本当に、本当にありがとうございます。」

おばあさんがほほ笑むと、男の人は照れくさそうに、人混みの中に消えていった。ほんの数秒のこの出来事が、私の中で日に日に大きくなっている。

私は、この経験を通して、私自身は、自由に歩いたり、逃げることができる。しかし、見渡してみると、出会ったような、腰の悪いおばあさんや、杖を使って歩いている人、車椅子に乗り、膝にかごを乗せて買い物をしている人も知った。このような人は、地震の時私以上に、どこに逃げたらいいのだろう、停電して、足元が見えない状況で、不安で、立ち尽くしてしまうのではないかと、思った。自分も危うい状況、恐怖はあるけれど、その中で、私の出来ることは、避難所に行く際、隣の家のおじいさんとおばあさんに声を掛け、隣を寄り添いながら、歩幅を合わせ、歩くこと。避難所で毛布を配る時に、ただ配るだけでなく、笑顔も配ること。できることは限られているけど、前向きに行動することが、その限界の壁を少しでも壊していける、と私は考えた。

「ここどうぞ。」

「ありがとね、その気持ちがとてもうれしいよ。」

四月の地震は、決して無駄にはしない。地震を経験したことで、私は学んだ。先日、私は初めてバスの席を譲った。きっと今までの私なら、迷いやためらい、わざわざ自分から関わりに行く事はないだろう。行動に移すことはなかつただろう。しかし、四月十五日の経験が私を後押しし、自分から、積極的に関わりを持ち、行動に移すという選択肢を選ばせた。実際に行動してみると、日常生活で生かしていけることは、たくさんあるのだと実感したし、自信がついた。そして何より、私が席を譲ったおばあさんの柔らかな笑顔は、私の次の行動への力と、勇気をくれた。

四月十五日。この日は、私の人生の大きな分岐点となった。災害は自然が相手のため、止めること、人間が太刀打ちすることはできないかもしれない。しかし、対策をとること、人と人とが手を取り合い、心を寄せ合うことはできると学んだ。今回の地震の風評被害で、温泉県である大分は、一時はキャンセルが相次ぎ、にぎやかだった観光の通りは、静かになった。しかし、そんな地震に負けないくらい、温かい人が多い場所、心が休まるほっこりできる場所、笑顔のパワーがみなぎる場所、それが大分県。大分、今日も元気です。

（第36回全国中学生人権作文コンテスト 法務事務次官賞受賞）